



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.

小学生ラインジャッジ 指導マニュアル



福島県小学生バレーボール連盟
審判規則委員会



小学生ラインジャッジ指導マニュアル

目 次

はじめに	4
小学生役員としての心構え	4
1. 基本姿勢とフラッグシグナル	6
(1) ボールデット時の基本姿勢	6
(2) ラリー時の基本姿勢	6
(3) ボールイン	7
(4) ボールアウト	7
(5) ボールコンタクト (ワンタッチ)	7
(6) アンテナ、ロープ、支柱、サイドバンド外側のネットに触れた時	8
(7) その他	8
2. 1つのラリーにおける動きの流れ	9
3. 判定のしかた	9
(1) ボールと床の接点	9
(2) ラインの判定	10
(3) ボールコンタクト (ワンタッチ)	10
4. トレーニング・マニュアル	11
(1) ルールに関する知識	11
(2) 基本的トレーニング	11
(3) 発展トレーニング	12
(4) コンビネーションに関するトレーニング	13
(5) アンテナ接触及び許容空間外側通過のボールに関するトレーニング	13

はじめに

福島県小学生バレーボール連盟審判規則委員会では、これまでに県内各地区所属審判員の資質向上と、円滑な大会運営のため「基本方針」を示すとともに、その基本方針達成のため、各種情報発信及び研修会等を実施しています。

このラインジャッジ指導マニュアルは、前記の取り組みの一環として、県内の小学生バレーボールの指導者が、大会出場の際に必要な選手によるラインジャッジの指導にかかわる方向性を示すものであります。

特に、新たにスポーツ少年団の指導者になった方においても、統一したラインジャッジの指導が行えるよう基本事項を中心に作成しています。

なお、本マニュアルは、小学生が理解し実践できるものを目指しているため、公益財団法人日本バレーボール協会（JVA）審判規則委員会が作成している、ラインジャッジマニュアルとは若干異なることをご理解いただいた上で活用されますようお願いいたします。

小学生役員としての心構え

バレーボールにおける試合のための審判団は、主審・副審・記録員・ラインジャッジ（以下「LJ」と表現する）・点示員で構成されます。

小学生役員として試合に携わる児童は、審判団の一員であることを自覚し、緊張感をもって与えられた役割に取り組むことが必要です。

指導者として以下に示す内容の指導を心がけてください。

- ◆試合を成功させるために「気持ちのよい態度」「きびきびした行動」を心がけること。
- ◆担当審判員の指示に従って行動すること。
- ◆服装、身だしなみを整えること。
- ◆長い試合になっても集中力が途切れないように、体調を十分整えて試合に臨むこと。
- ◆設定時間（集合時間）に間に合うように、余裕をもって行動すること。
- ◆自分が担当するチームの試合や練習を見て、チームや選手の特徴を把握したり、仲間のLJの試合中の動きなどを観察したりするなど、研究して自分の判定に生かすこと。
- ◆個人での勝手な行動をとらず、審判団として常に連絡を取り合うことができるよう、待機・休憩・食事などをすること。

1. 基本姿勢とフラッグシグナル

(1) ボールデッド時の基本姿勢

- ① コーナーから約 2 m 離れた位置に立つ。
フラッグは自然に体側に沿わせる。

(写真①、②)

- ② 基本姿勢として、ラリー時は、一旦写真
①の姿勢になり、サービス開始時に写真
②の準備姿勢になる。

- ③ フラッグは、ポールに人差し指を添えて
持つ。(写真③)

- ④ フラッグシグナルは、見栄えよく示すように心がける。

- ⑤ 左側からのサービスの時は、サーバーの邪魔にならない
ように、サイドラインの延長線上で、サーバーの後方に
移動する。移動はするが、サーバーのフットフォールト
を見ているので、横にはずれない。サーブ後はすぐに
所定の位置に戻る。

ただし、壁まで下がり、なおサーバーの邪魔になるよう
であれば、一步左にずれる。

- ⑥ ラリーに入る時、フラッグは音をたてずに、持ち手側の
脚の後ろに回す。(写真④)

(2) ラリー時の基本姿勢 (写真④、⑤)

- ① 担当するラインの延長線上に左足 (左利きであつても) がくる
ように位置取りをして、ややコートの内側からラインを見る。
左足が前になるように、両足は開き両膝を曲げ、レシーブする
ような低い姿勢でボールに集中する。

- ② フラッグは、前から見えないように、持ち手側の脚の後ろに
回す。

- ③ フラッグを持たないほうの手はひざの上には置かない。

- ④ ボールが担当するライン方向に来たら、ボールより先にライン
上に目を移し、ボールと床の接点を見て判定する。

- ⑤ ラリー中は、自分の担当ライン方向にボールが来る可能性が
ある場合は、写真⑤のように低い姿勢をとる。そうでない場合
は、写真④のようにやや高い姿勢をとるようにして、必要に
応じてこの 2 つの基本姿勢を使い分けながら判定に備える。



写真①



写真②



写真③



写真④



写真⑤

(3)ボールイン (写真⑥)

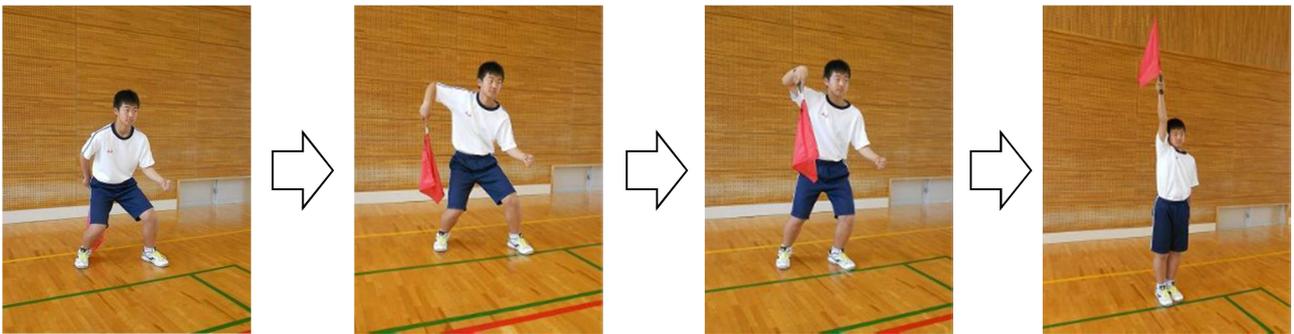
- ①まず構えた姿勢で判定を行い、すばやくフラッグシグナルを示しながら姿勢を正す。シグナルはひじを伸ばしてフラッグでラインを指す。体と腕（フラッグ）の角度は45度を保つ。
- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
- ③主審がアウト、イン、ボールコンタクトなどの反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真①)
- ④目が合わない場合も、写真が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真①)



写真⑥

(4)ボールアウト (写真⑦)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、写真のような連続的な腕の動きで、すばやく姿勢を正してフラッグシグナルを示す。かかとかからフラッグ先端までが一直線になるようにする。



写真⑦

- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
- ③主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。
- ④目が合わない場合でも、主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真①)

(5)ボールコンタクト (ワンタッチ) (写真⑧、⑨)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、素早く姿勢を正してフラッグシグナルを示す。シグナルはフラッグを体の前で垂直に立て、フラッグの先端にもう一方の手の平でふたをするようにあてフラッグと手でTの字を作るようにする。フラッグを持っていない方の手は指先をきちんと伸ばし、



写真⑧

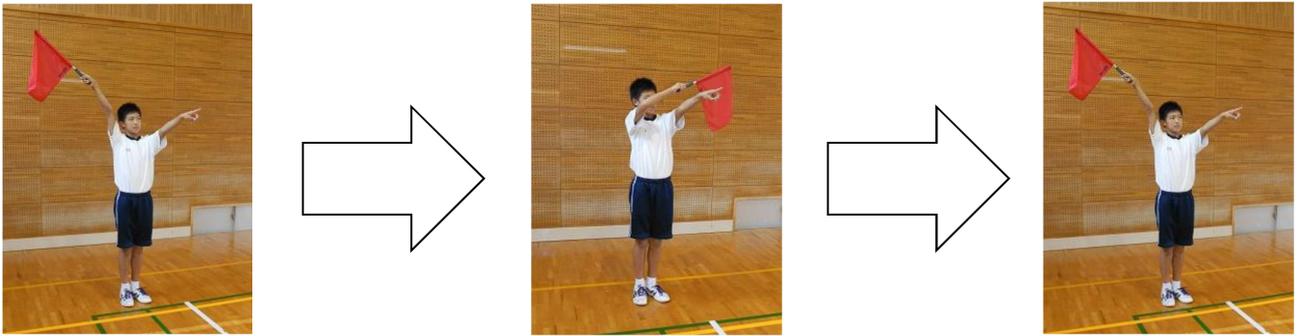


写真⑨

- 手はあごの高さに揃える。後ろからも見える位置まで、フラッグを体から離す。
- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
- ③主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。
- ④目が合わない場合でも、主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。

(6)アンテナ、ロープ、支柱、サイドバンド外側のネットに触れた時 (写真⑩)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、すばやく姿勢を正して当たった方のアンテナを指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(フラッグを持つ手が顔の前に出るように)



写真⑩

- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
③主審が反則の種類を示し始める時に姿勢を戻す。(写真①)
④目が合わない場合でも、主審が反則の種類を示し始める時に姿勢を戻す。

(7)その他

- ①サーバーのフットフォールの判定
→ 該当するラインを指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(写真⑩)
②ボールが天井に当たった場合の判定
→ 天井を指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(写真⑩)
③視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
④主審が反則の種類を示し始める時に姿勢を戻す。(写真①)
⑤目が合わない場合でも、主審が反則の種類を示し始める時に姿勢を戻す。
⑥ボールが床に触れたかどうか(パンケーキ)のプレーで、自分側のコートの床にボールが触れたことが確認できた場合は、写真⑤の姿勢のままフラッグを前に出し、床を2・3回たたくようなシグナルを示す。

※タイムアウトの時は、休めの姿勢で待機する。(写真⑪、⑫)

※セット間は、フリーゾーンで行われるチーム練習の邪魔にならないように、後ろに下がって座って待機する。



2. 1つのラリーにおける動きの流れ

- (1)自分の担当ラインに正対し、写真①の姿勢で直立する。
- (2)サービス許可の吹笛で、サービス側のL Jは写真①の姿勢のままフットフォールトを判定する。レシーブ側のL Jは写真④、⑤の姿勢で判定の準備をする。ラリー中は、写真④と写真⑤の姿勢を使い分けながら判定に臨む。
- (3)ボールデッドになった時に判定する。(写真⑥～⑩)
判定の必要がない場合は、すぐに最初の姿勢に戻る。(写真①)
- (4)主審が反則の種類シグナルを示し始める時に最初の姿勢に戻る。(写真①)

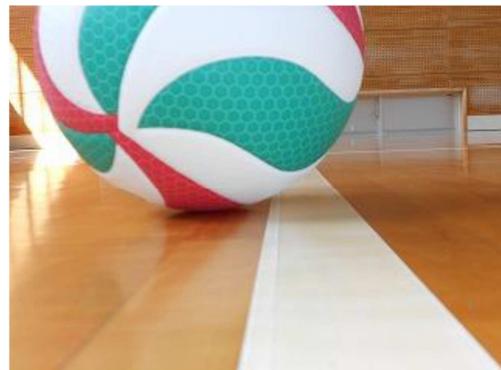
3. 判定のしかた

(1)ボールと床の接点

写真⑬のように上から見るとラインに接しているように見えるが、実際には写真⑭のように接していない場合がある。そのため、姿勢を低くして見る必要がある。また、小学生がこのような場面での判定をより正確にできるようにするために、ラインの延長線上に左足がくるように位置して、ラインのやや内側からボールの接地面を見るようにするとよい。



写真⑬

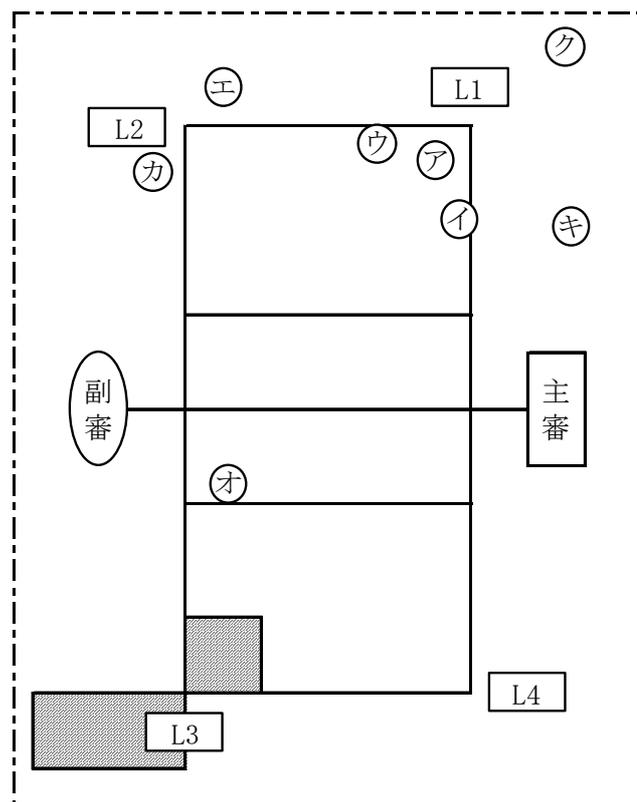


写真⑭

(2)ラインの判定 (図1 及び下表)

- ①「一人一線」の原則で、担当ラインのイン、アウト等の判定を、責任を持って行う。
- ②ボールインについては、担当ライン内側2 m以内について判定する。
- ③ボールアウト (ボールコンタクトも含む) は、自分の担当ラインの垂直面を越えていくボールについて全部判定する。たとえ、自分の近くにボールが落ちてても自分の担当ラインの垂直面を越えなければ、自分はシグナルを示さず、他の担当L Jに任せる。
- ④二人が同時に判定する場合 (図1 ア、ク) は、のようなコーナーから半径2 m以内のインボールや、エンドラインから見てもサイドラインから見てもアウトのボールは二人同時にシグナルを示す。二人のシグナルがそろうことが望ましいが、差し違になった場合は主審の指示に従い、どちらかがフラッグを下げる。

図1



位置	判定者	位置	判定者	位置	判定者
ア	L1 L2	エ	L2	キ	L1
イ	L1	オ	L3	ク	L1 L2
ウ	L2	カ	L3	ケ	誰も出さない

(3)ボールコンタクト (ワンタッチ)

小学生には、ボールコンタクトを見に行くのではなく、ライン判定を主に見るように指導する。

- ①相手からの攻撃に対するブロッカー、レシーバーのボールコンタクトを判定する。
- ②ボールコンタクトは、原則としてボールが落ちたコート側のL J 2人がシグナルを示す。ただし確実に確認できた場合は、ボールの落ちた反対側コートのL Jがシグナルを出してもかまわない。また、はっきりボールコンタクトと判断できず、ボールがコート外に落下したら、その担当のL Jがアウトのシグナルを示す。
- ③ボールコンタクトがあっても、ボールがコート内に落ちた場合はインのシグナルを示す。
- ④レシーバーがボールをはじいて自コート外に出した時もボールコンタクトのシグナルを示す。

4. トレーニング・マニュアル

ここでは、小学生がLJとして試合に参加するために必要なルールに関する知識し、育成の基本的要領を示す。

(1)ルールに関する知識

LJは、次のような内容について判定し、フラッグシグナルを示す。

- ①担当するラインのイン、またはアウト。
 - ②レシービングチームがアウトボールに接触したとき。(ボールコンタクト=ワンタッチ)
 - ③サーバーのフットフォールト
 - ④ボールがアンテナに触れたときやサービスされたボールがネット上方の許容空間の外側を通過したとき。
 - ⑤ボールがネット上方、許容空間外側のネットの垂直面を通過したとき。
 - ⑥競技者がボールをプレーしているとき、または、プレーを妨害しようとしてアンテナに触れたとき。
 - ⑦サービスが打たれた瞬間に、サーバーを除く競技者がコート外へ踏み出ていたとき。
- 少なくとも、①～③は確実に意識して判定できるように育成したい。慣れていくにつれて、④～⑦の内容についても理解して判定できるようになれば高いレベルで役割を果たせるようになる。なお、⑦の判定については、フラッグを振るシグナル(写真⑩)を示す。

(2)基本的トレーニング

①フラッグシグナルを、素早く・スムーズに示すトレーニング

《要領》 指導者が、「イン」「アウト」「ワンタッチ」「アンテナ」などと順不同で繰り返し判定の種類を言って、その判定に対応するシグナルを、児童が正しく素早く・スムーズに示す。フラッグがない場合は、人差し指を伸ばした状態でさせても十分効果は期待できるので、一度に多くの児童がトレーニングできる。

大切なことは、判定した直後に迷わず正しいフラッグシグナルを示せるようになることである。(写真⑬)



写真⑬

②実際にボールを打ってイン・アウトを判定し、判定に合うシグナルを正しく・素早く・スムーズに示すトレーニング

《要領》 写真⑯のように 1 本のラインに対して児童が 1～2 名程度ずつ向かい合うように配置し、指導者がボールを打って、イン・アウトに対する正しい判定と対応するシグナルを正しく素早く・スムーズに示せるように繰り返し行う。低い姿勢でボールと床の接点を見ることが基本である。「ラインから 2 m 以内のシグナルを示さなければならないイン」「ラインから 2 m 以上離れたシグナルを示さなくてよいイン」「アウト」の 3 種類を打ち、シグナルを示すべきボールと示さなくてよいボールの違いを理解させる。ボールが落ちる前にシグナルを示してしまう、ゆるいボールに対してシグナルが示されないなどがないようにシグナルを示すタイミングについて理解させる特に、ラインぎりぎりに落ちたボールの判定について、差し違い（同じボールに対してインとアウト両方のシグナルが示されること）があった場合は、確認しながら行い、ボールの見方についてよく練習させる。



写真⑯

(3)発展トレーニング

①ブロッカーやレシーバーをつけて、イン・アウト・ボールコンタクト（ワンタッチ）を判定してシグナルを示すトレーニング

(写真⑰)

《要領》 ブロッカーやレシーバーをつけて、強打・軟打・フェイントを打つ。ボール、ブロッカーの手や指先、レシーバーを視野に入れることに慣れさせる。

ボールコンタクトは、はっきり見えた場合だけシグナルを示す。確信がない場合は、シグナルを示すべきではないことを理解させる。ブロッカーの指や左右をかすっていくケースは、主審・

副審からは非常に見にくいケースがあるので、原則としてボールが落ちたコート側の L J 2 人がシグナルを示す。ただし確実に確認できた場合は、ボールの落ちた反対側コートの L J がシグナルを出してもかまわない。

ライン際のレシーバーのボールコンタクトも主審の死角になるケースがあるので、ライン判定に注意しながら視野に入れることが大切である。



写真⑰

(4)コンビネーションに関するトレーニング

①コーナーの判定や自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示さないケースのトレーニング

《要領》 1番と2番、2番と3番の組み合わせのL Jが担当すべきコーナー近くのボールのイン・アウトの判定について、(2)の②と同様の要領でボールを出してトレーニングする。コーナー2 m以内のインボールに対して2人が同時にシグナルを示すタイミングや、自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示すべきではないアウトボールについて理解させる。

②ブロッカーやレシーバーをつけた、複数のL Jによる判定及びシグナルを示すトレーニング

《要領》 複数のL Jを配置して、写真⑱の要領で行い、判定及びシグナルを示す。

コーナー2 m以内のインボールに対して2人が同時にシグナルを示すタイミング、自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示すべきではないアウトボール、誰がボール・コンタクトのシグナルを示すべきかについて理解させる。



写真⑱

③ゲーム形式でのトレーニング

《要領》 ゲームの中で、プレーに応じて位置や視野を適切に取りながら、判定しシグナルを示す。サービス～ラリー～判定～シグナル～シグナル終了までをスムーズに行う。

(5)アンテナ接触及び許容空間外側通過のボールに関するトレーニング

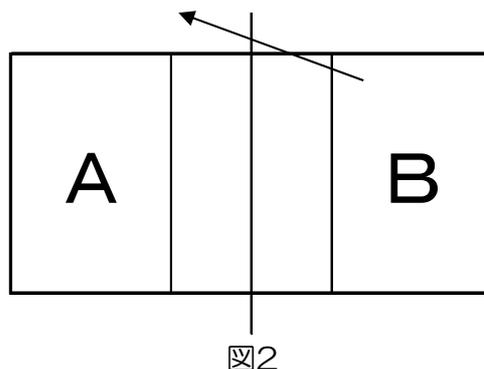
①アンテナ・ロープ・支柱・サイドバンド外側のネット等に触れた時に、タイムリーにシグナルを示すトレーニング

《要領》 アンテナ近くでプレーをしたり、レシーブしたボールがアンテナ等に接触するような状況を作り出したりして、アンテナ・ロープ・支柱・サイドバンド外側のネット等に触れた時に、最も見やすい位置にいるL Jが、タイムリーにシグナルを示す。

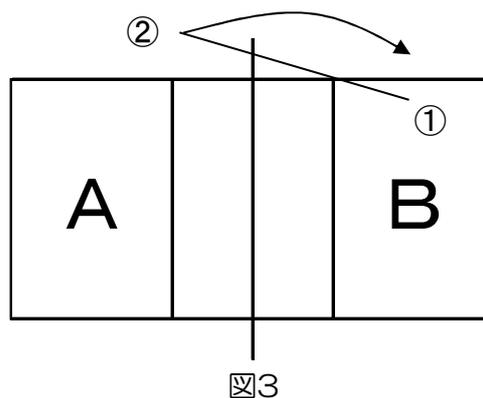
②許容空間外側を通過するボールに対する判定及びシグナルを示すトレーニング

《要領》 以下に示した6つのケースについて、許容範囲外側を通過したり、通過しなかったりするようなボールをさまざまな角度から打ったり、返球したり、取り戻したりする。どの位置のL Jが見るべきかなどを理解させる。ボールのコースに入るために、極端に動いてライン判定がおろそかになったり、コースに入らないで判定すると不信感をもたれたりするので、動く範囲を十分に確認する必要がある。

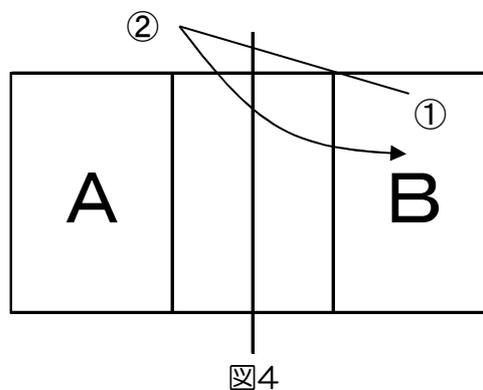
- i) 許容空間外（アンテナの外側または上方）を通過してアウトになった場合は、チームの1・2回目の接触後は落ちた瞬間にアウトを示す。チーム3回目の接触後はネットの垂直面を通過した瞬間にアウトを示す。（図2）



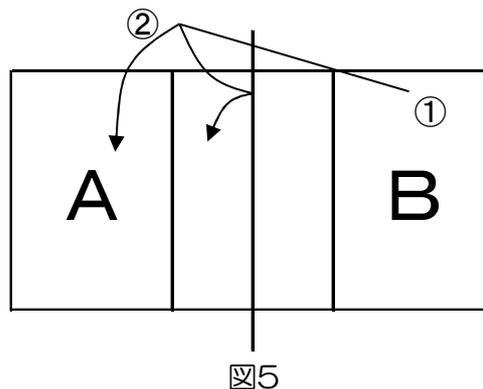
- ii) Bチームの①番の選手がレシーブしてボールが、相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て②番の選手が取り戻した場合は、何も示さない。（図3）



- iii) Bチームの①番の選手がレシーブしたボールが、相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て②番の選手が取り戻し、許容空間内を通過した場合は、ボールがネット上を完全に通過した瞬間に、頭上でフラッグを一往復振る。（図4）



- iv) Bチームの①番の選手がレシーブしたボールが相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て②番の選手が取り戻しに行き、アンテナ内側のネットに触れたり、Aコートの床に触れたりした場合は、何も示さない。（図5）



V) Bチームのコートから許容空間を通過して、Aチームのフリーゾーンにボールが向かって行った場合に、Bチームの選手がボールに触れたら。ボールに触れた瞬間にそのコースの人が頭上でフラッグを一往復振る。

(図6)

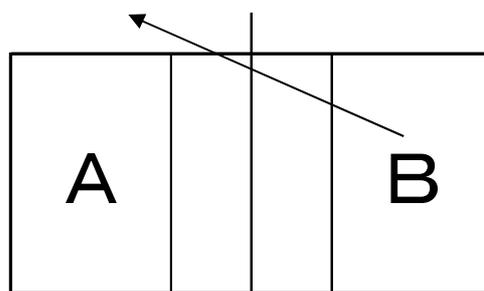


図6

VI) Bチームの①番の選手が、フリーゾーンから打ったボールが、許容空間外を通過してAチームのコートに向かっていく場合、チームの1・2回目の接触後は、ボールが床に触れるか選手に触れた瞬間に頭上でフラッグを一往復振る。チームの3回目の接触後はネットの垂直面を通過した瞬間に頭上でフラッグを一往復振る。(図7)

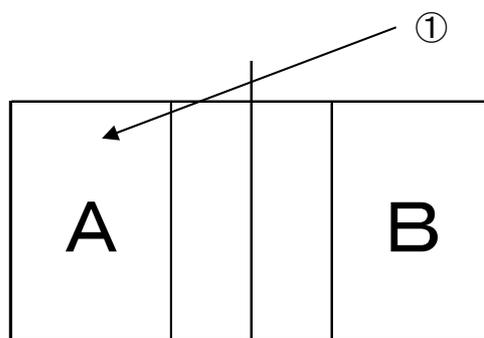


図7